

未来を語る可能性

—リルケ『マルテの手記』の物語論—

寄川真弓

はじめに

リルケの『マルテの手記』は、全部で71の断片から構成されている。複数の断片が組み合わせられて一つの作品をなしているが、いずれの断片においても完結する話はなく、結末もわからないようになっている。最終的にマルテは没落していくのか、それとも明るい未来へ向かっていくのか、それすらもわからない。『マルテの手記』という作品は、リルケ自身が伝えているように、いつでも書き足すことができるようにできあがっている。

『マルテの手記』は、ウルリヒ・フュレボルンが端的に特徴づけたように、近代小説の始まりを告げるものである⁽¹⁾。近代小説を特徴づける新たな形式は、物語が完結することを避ける。完結を避けるという構想は、ユルゲン・ペーターゼンが指摘しているように、フリードリヒ・シュレーゲルをはじめとする初期ロマン派の構想にまでさかのぼることができる⁽²⁾。たとえば、『アテネウム断片』のなかでシュレーゲルは、小説とは完結するものではなく、無限に重なり合うように終わりが無いものである、と説明していた。

さらにペーターゼンは、物語は時間どおりには進まない、というノヴァーリスの主張を引用しながら、小説が一つの文体に統一されることさえも退けようとする。むしろ、いくつもの異なる話が集まってこそ、はじめて一つの小説ができあがるのだという。

小説とはつねに開かれたものであるという考えは、『マルテの手記』にも当てはまるだろう。リルケ自身が語っていたように、『マルテの手記』は完結した作品ではない。最後の断片は、もはやマルテの物語ではなく放蕩息子の物語りであり、読者は主人公であったはずのマルテがその後どのようなようになったのかを知るこ

とはできない。また、断片は時間の流れに沿って並べられてはいないし、文体も統一されていない。内容からいっても形式からいっても、『マルテの手記』のもつ物語のスタイルは、シュレーゲルやノヴァーリスの考えていた未完の構想と一致している。そうであれば、初期ロマン派の考えていた近代の新しい小説像が、リルケの作品のなかではじめて実現されたといっても、過言ではないであろう。

このように、未完結の物語と多様な語りが『マルテの手記』という作品を特徴づけている。そこでさらに本論文では、未来について語ることの可能性という点から、『マルテの手記』の物語論を取り上げていきたい。また、未来を語る可能性から物語が開かれていることの意味を考え直し、さらにそこから、物語のもつ読者への影響力を考えていくこともできるだろう。

これによって、未来を語る可能性という本論文の主題を基軸に据えると、『マルテの手記』の物語論もよりはっきりとした形で見えてくる。そのために、まずはこれまでの研究史を踏まえたうえで、さらにそこから一步踏み出す形で、リルケの物語論を未来の語りへと導いていこう。

1. 過去と現在への語り

『マルテの手記』という作品には、自由な形式で書かれたさまざまな語りが寄せ集められている。多様な語り方については、これまでもすでに多くの研究者によって指摘されてきた。

たとえば、ウルリヒ・フュレボルンは、最初の断片1から最後の断片71までのあいだには語りの発展が見られるといい、語りの発展を通してそこから新しい語り方が生まれてくるのだという⁽³⁾。エルンスト・フェドーア・ホフマンは、そこにはむしろ主観的な手記から客観的な物語への移行が認められるという⁽⁴⁾。

それに対してユーディット・ライアンは、テキストのなかの仮定法の使われ方に着目しながら、『マルテの手記』は完成された物語ではなく、つねに「わたし」による想像によって補われていく物語なのだから、マルテによる客観的な物語などは実現してないのだ、と主張している⁽⁵⁾。

ハロ・ミュラー＝ミヒャエルスは、語りの視点がそもそも多様なのだという

ころから出発して、ある特定の語り方にだけ着目するような接近方法を避ける⁽⁶⁾。したがって、客観的な語り方であるのか、あるいは主観的な語り方であるのか、ということは問題にならない。むしろ、読者への影響を重視して、読者が『マルテの手記』を通じてどのように変化していくのかを検討していく。このような受容美学の観点からはじめて、マルテの語りがもっている新しい意味も明らかになってくる。同じようにユルゲン・ペーターゼンも、受容美学の観点から『マルテの手記』のテキスト解釈を試みている⁽⁷⁾。

本論文も、これまでの研究を踏まえて語りのもつ可能性を考察していくが、まずは、多様な語りをもつという『マルテの手記』の内容をかんたんに説明しておこう。

『マルテの手記』という作品は、「わたし」の独白によって始まる。「わたし」とはマルテのことであるが、マルテは故郷を離れて知人のいないパリに住みながら、作家としての仕事を続けている。街のなかを歩き回ってそこで見たできごとや人物を描写することから、マルテはこれまでの仕事を振り返って自己の内面を告白していく。

そこから子どものころの回想へと移っていくのであるが、回想のなかでは、マルテ以外の語り手も登場する。たとえばマルテの母、母の妹であるアベローネ、祖父のブラーエ伯がそうである。また、語り手が自分自身に向かって語るだけではなく、特定の相手や読者へ向けて語りかけることもある。一人称の「わたし」だけではなく、二人称の「きみ」や三人称の「かれ」も使われている。

時間構成という観点からいえば、物語は、マルテが手記を書いている現在から始まって、子どものころや祖父の時代を経て、書物に書かれた人物が生きていた時代へとさかのぼっていく。たしかに、ここにも多様な語り方はあるのだが、これまでの研究では、現在と過去についての語りだけが注目されて、未来についての語りには触れられてこなかった。

そこで本論文では、『マルテの手記』における未来についての語りを中心に、リルケの物語論を考察していくことになる。まず手始めに、作品のなかで未来について語るができる人物として登場する、マルテの祖父・ブラーエ伯を考察の対象として取り上げてみよう。

2. 未来への語り

マルテは祖父のブラーエ伯を、時間の順序を無視した独特の語り口をもつ人物として描き出しているが、ブラーエ伯のことを本当の意味で物語ることのできる人物だと呼んでいる。

たとえば、ブラーエ伯は、すでに亡くなった人をいまでも生きている人であるかのように話すことができたという。また、じかに知ることのできない歴史上の人物も、直接知っているような親しい人のように語ることもあったという。祖父のブラーエ伯は、過去のできごとを現在のことであるかのように話すだけではなくて、未来のことをも現在のことのように話す人物だったと伝えられている。

祖父にとっては、時間の順序などまったく何の役にも立たなかった。死はちょっとしたできごとであり、まったく無視されていた。一度でも祖父の記憶のなかに残った人は、まだ生きているのであり、たとえその人が死んでしまっても、わずかな変化もないのである。祖父が未来のことを現在のことのようにかたくなに信じていたことは、祖父が亡くなったあとも、ながく語り継がれていた。(Rilke: *Werke*, Bd. 3, S. 475)

ブラーエ伯は未来のことをもあたかも現在のことであるかのように話していた。それは断片15のなかにあるつぎのようなエピソードによっても伝えられている。

あるときブラーエ伯は一人の若い女性に話しかけた。話の内容は、これから生まれてくる、女性の子どもについてであり、その子が旅に出るという具体的な話であった。話しかけられた女性のほうは、子どもを宿してまだ三か月めであったので、驚きを乗り越えて恐れを抱きながらも、絶え間なくつづくブラーエ伯の話に耳を傾けていたという。

このエピソードは、ブラーエ伯が意味不明なことを話す老人だったということ語る事例ではない。話はあくまでも、未来と現在とのあいだを区別することなく話す人物についてのエピソードであり、独特な語り手となって登場してくるブラーエ伯についての、欠かすことのできないエピソードなのである。ブラーエ伯

がいったん話しだすと、まだ生まれていない子どもは、もう生まれてきたかのよう動き出すのである。それは、語り手であるブラーエ伯の絶え間ない話し方や、驚きと恐怖で気が遠のいていく女性のようにすからも伝わってくる。

ブラーエ伯のような時間にとらわれない語り方とは、端的に言えば、過去・現在・未来を自由に語る能力のことである。マルテは、手記を書いている現在を描写することから始めて、子どもを回想し、自分が生まれてくるまえの話や歴史上の人物について語りながら、最後には、聖書のなかの寓話を語り直すところに達する。時間の流れに沿って物語が並べられているわけではない。現在が過去を呼び起こし、過去が現在を呼び起こすのであって、時間の枠にとらわれずに、マルテは自由に語っていく。

そうであれば、現在と過去が混在するようなマルテの語り方にこそ、祖父ブラーエ伯の語り方と一致する点があるのではないだろうか。そしてもしマルテが未来についても、現在のことのように語る事ができるならば、ブラーエ伯の語りを継承していることになるであろう。

マルテのもつ語りの特徴をより詳細に解明するためにも、ひきつづいて、マルテが未来について語ろうとしていたのかどうか、そして、未来について語る事ができたのかどうかを考察していこう。それによっではじめて、マルテにとって予言的な語りがあるのかどうか、という問題も解き明かされることになるであろう。

3. 予言的な語り

リルケにとって、予言的な語りをする人といえば、ドイツの詩人フリードリヒ・ヘルダーリンであった。リルケは、『マルテの手記』を書き終えたときに、大きな仕事を終えたあとの満足感を得たのみならず、虚脱感ともいべきものを抱いた。虚脱状態に陥いるのなかで、リルケはつぎの作品を模索していたのだが、まさにそのとき、リルケはヘルダーリンの作品に出会って大きな感銘を受けたのである⁽⁸⁾。

ヘルダーリンは、初期ドイツ・ロマン派が活躍していたのと同時代の人であっ

たが、ロマン派の流れに乗ることもなく、独自の道を歩んでいく詩人であった。『滅びのなかで生まれるもの』という論文のなかで、ヘルダーリンは、滅んでしまった現実の姿のなかから可能的なものが生まれてきて、ふたたび現実のものとなっていく過程を説明している。現実のできごとが、関連を失って絶えてなくなることにはあるが、それは可能的なものが入り込むことによって、ふたたび現実となってよみがえってくる、というのである。ヘルダーリンは、失われたものが再生してくる過程を理想の想起と呼んでいた。

ヘルダーリンにとって理想を思い起こすとは、詩や物語などの伝承された作品を通して、ギリシア文化の興隆と没落を理解することを意味している。文化が頂点に達すると、すでにそのときには、文化が解体して没落することも準備されている。だが、それだけではない。まだ現実のものとはなっていないが、可能的なものとしては、新しい文化が生まれてくるのだともいえる。まさにそのときに、詩人が登場して、ことばを発するのである。そして、詩人の語ったことばが文化として保持される。保持されたものは、現実の文化が消滅したのちにも、思い起こされて新しい文化となる。それは、かつては現実であったものなのだが、いまでは現実となりうるものなのであって、詩人のことばを通してよみがえってくるものなのである。

ヘルダーリンの考えによれば、可能的なものが入り込んでくるのは、現実のものが滅んでしまって没落していくときなのだ。まさにそのように、家族を亡くして一人で孤独に耐えながら、故郷から遠く離れて異国の地に暮らすマルテにとっては、不安と病気を抱え、死について思い悩む姿こそ、まさに没落へ向かっているときなのである。マルテの置かれたこの状況こそが、ヘルダーリンの考えていたような、滅びゆく現実のなかで可能的なものが生まれてくる場面なのである。

では、リルケの『マルテの手記』のなかに、可能的なものへの語りを読み取ることができるのだろうか。

4. 可能的なものへの語り

テキストの読みという観点からいえば、リルケの『マルテの手記』は、読者が

自由に読もうとすることによって、読みの可能性を広げていくようなテキストであるといえる。ペーターゼンが強調しているように、読者による自由な解釈を可能にしていくのが近代小説の特徴なのである⁽⁹⁾。そうであれば、テキストそれ自身のなかに、未来への語りを可能とするような場面も準備されているのではないだろうか。

『マルテの手記』の断片14をよく見ると、未来への語りの可能性も浮かび上がってくる。マルテがはじめて自己を振り返って、作家としてのこれまでの仕事を反省している断片である。断片のなかでマルテは、自分自身に問いかけるのだが、問いかけは全部で七つあり、いずれの文章も「……はできるのだろうか」という疑問文で始まって、「できるのだ」という強い肯定文で終わっている。まず、最初の問いかけを見てみよう。

人はまだ、本当のことや大切なことを何も見なかったし、気づかなかったし、言わなかった、と考えることはできるのだろうか。(Rilke: *Werke*, Bd. 3, S. 468)

本当のことや大切なことで、まだ誰にも知られていないことがあるのだろうか。マルテは、まだ誰も見なかったし、気づかなかったし、言わなかったことがあるのだ、と断言している。故郷のデンマークを離れてパリにやって来たマルテは、友人や知人もなく一人さみしくアパートで暮らしていた。そこで街で見たことを書きはじめる。マルテが現実に見たものは、病院の悲惨な状況や倒れている男の姿であった。マルテはパリにいるのだが、大都会のもつ華やかさなどに触れることはない。マルテは不安に満ちていて、死ぬことばかりを考えている。まるで生きていることに絶望したかのように。

しかし、マルテは絶望していたのではない。可能的なものをあきらめたわけでもない。マルテは、七つの可能性を熟考したあとで、最後に自分の決心をつぎのようにきっぱりと述べている。

でも、すべてが可能であるならば、ほんのわずかでも可能性があるのならば、

絶対に何か起きなければならない。おそらくそうかもしれないと思うのなら、忘れていたこのことから始めなければならない。始めるのにもっともふさわしい人ではないとしても、ほかには誰もいないのだから。(Rilke: *Werke*, Bd. 3, S. 470)

マルテは、可能性さえあれば、たとえどんなにわずかな可能性であろうとも、そこには何かが起こりうるのだと考える。ここに、未来へ向かう可能性があるといえないだろうか。これから起こるであろうことに目を向けて、未来に何かを起こすべく、マルテは立ち上がるのである。

では、マルテにできることとは何であろうか。それは、書くことにほかならない。書くことだけがマルテにできることなのだから。ヘルダーリンが語っていたように、詩人は、現実にごとかが起こるまえに、その何ごとかを起こりうるものとしてことばで表そうとする。それゆえにヘルダーリンの詩は、予言者の発することばのように響きわたるのである。

リルケは『マルテの手記』のなかで、可能性があれば書きはじめなければならない、とマルテに語らせている。可能性があれば、つまり何か可能的なものがあるのなら、それは、現実になるまえに、まずもってことばにならなければならない。この点において、リルケの物語論はヘルダーリンの詩論へと通じていく。そうだとすれば、マルテもまた、予言者のように語る事ができたのであろうか。

ここで、断片18を見てみよう。マルテの語りは、予言者の発することばのように響きわたってくるだろうか。

まだほんの少しのあいだ、わたしはすべてを書くこともできるし言うこともできる。でも、わたしの手がわたしから離れていく日がくるだろう。書くようにと手に向かって言っても、手はわたしが思いもしないことばを書くだろう。いまとは違う解釈がなされるとき、そのときには、もはやどんなことばもほかのことばから離れ、どんな意味も雲のようにちりぢりに散らばり、水のように流れ落ちてしまうだろう。(Rilke: *Werke*, Bd. 3, S. 490)

マルテは、書き手である自分と、その書き手である自分の手が分離してしまう可能性を示唆している。だがそれ以上に、自分がそう望んでも、あるいは望まなくても、二つは別のものになってしまうと予言している。そしてこのとき、これまでとはちがう別の解釈の時代がやってくるのだと警鐘を鳴らす。

たしかに、断片14のなかの七つの可能性はマルテが望んだことではある。これらの可能性の実現に向けて、マルテは書きはじめる。しかし断片18において、自分と自分の手が離れてしまうことは、もはやマルテが望んだことではない。なぜなら、マルテは書きはじめるまえにすでに、自分と自分の手が分離してしまうのではないかという考えにとりつかれて、恐れおののいていたからでもある。マルテははじめから、分離の可能性を消去することができなかった。

ひょっとするとこのときに、未来に起こるであろうことをあらかじめ語っていたのではないだろうか。そして、未来への可能性もそこから開かれてくるのではないだろうか。

5. 未来への可能性

『マルテの手記』のなかの主人公はマルテであった。だがマルテは、最後の断片のところで、主人公から語り手へと変わっていく。断片71のなかでは、マルテはもはや主人公ではなく、語り手となって物語る側に立っている。

この断片は、新約聖書のなかの有名な放蕩息子の話であるが、物語はマルテの解釈によって新たに語り直されていく。物語の主人公は、マルテではなく、登場人物の放蕩息子となる。では、放蕩息子の物語についてのマルテの解釈を見ていこう。

マルテの解釈によると、少年へと成長した男の子は、家族の少年への愛が重荷になってきたために、故郷を捨てて放浪の旅に出る。少年は誰からも愛されたくないと思い、また誰も愛するまいと決心する。しかし、固い決意も何度となく揺らいでしまう。放浪を繰り返しているうちに、やがて放蕩のすえに貧しい日々を送るようになる。数年が過ぎてようやく羊飼いとなり、静かな日々を過ごしていたとき、ふとしたきっかけで神への愛を求めるようになる。そのとき放蕩息子は、

自分がかつて成し遂げることのできなかつたものをこれから実現しようと決心するのである。

放蕩息子は子どものころのことを思い出そうとした。落ち着いて考えてみると、子どものころの思い出は、空白のまま現れてきた。どれも予感のように漠然としたものだった。過去のことだと思っていた子どものころが、ほとんど未来のことのように思えてきたのだった。(Rilke: *Werke*, Bd. 3, S. 634)

子どものころの思い出とは、いまの自分にとっては過ぎ去った過去の時代である。だが、これから起こることであるかのように現れてくる。このとき、過去と現在と未来が交錯してたがいに重なりあう。さまざまな経験を積み重ねて大人になった現在の自分が、幼年時代という過去を取り戻そうとする。そのために帰郷するのだ。だがそれは、過去の自分に戻ることではない。帰郷とはむしろ、別の自分になるために新たな一步を踏み出すことであり、未来へ向けての一步なのである。

故郷に戻った男は、家族のなかにあたたかく迎え入れられる。家族から愛されているように見えるが、だが本当には愛されてはいない。だが、愛されてはいないと知って、かえってほっとするのである。愛されてはいないというこの確信が、かれを安心させるのである。この逆説的な心理描写が、放蕩息子の未来を物語るように、体験話法によって暗示的に語り出される。

きっと彼はとどまることができたのだろう。(Rilke: *Werke*, Bd. 3, S. 635)

放蕩息子が故郷に戻ってくることは、聖書のなかの話としてはよく知られている。時間上のできごととして考察すると、帰ることは現在における一時的な動作にすぎないが、とどまるとは未来を指向した時間の連続であるといえる。そうであれば、放蕩息子が帰郷したのちに故郷にとどまることも、暗示的にであれ、可能性としては示唆されていたのではないだろうか。

ここで注意したいのは、放蕩息子の物語が可能性を示唆した一文で終わっているということである。未来を指向して可能性を暗示する最後の一文によって、放蕩息子の話は、最後の断片71だけではなくて、『マルテの手記』という作品の全体をも、未完のままに終わらせてしまうのである。

放蕩息子が誰であるのか、人々は知らなかった。放蕩息子を愛することなど、いまでは途方もなく難しかった。放蕩息子は、自分を愛することができるのは神だけだ、と感じていた。ただ、神のほうは、彼を愛するつもりはまだなかった。(Rilke: *Werke*, Bd. 3, S. 635)

神は、まだ、放蕩息子を愛するつもりはなかった。まだというこのことばには、可能性が残されている。可能性が残されていなかったならば、神が放蕩息子を愛するということも考えられなかっただろう。しかし、まだということばによって、神と放蕩息子の関係が、一つの可能性となって未来へ開かれていく。ひょっとするといつの日にか、神が放蕩息子を愛することがあるのかもしれない。まだということばには、このように未来へ向けての可能性が含まれている。

未来への可能性を残しながら、『マルテの手記』は終わっていく。主人公であったマルテは、最後の断片71では、語り手へと変わってしまっているから、マルテについては、もはや何も知ることはできない。マルテがその後どうなってしまったのか。読者には知るすべがない。放蕩息子の未来もまた、わからないままに終わってしまう。マルテの未来と同じように、放蕩息子の未来も開かれたままで終わる。

最後の一文は閉じられずに、可能性を残したままで終わっている。むしろそれは、読者が放蕩息子のその後を考えることができるように、残されているといってもよいだろうか。そうであれば、『マルテの手記』というリルケの作品は、主人公であるマルテについての物語と、語り手となってマルテが語る物語との、いずれもが完結することがないように、二重の意味で未完のままで終わってしまう作品なのである。

では、手記を書き終えたのち、マルテはどのような運命をたどるのであろうか。

最後に、マルテの未来について、テキストから読み取れるものを探してみよう。

6. 未来を語ること

現在と過去が交錯するなかで、未来を描き出す断片がある。それが断片68である。断片68は一つの独立した物語のように始まるのだが、そのあとに接続詞によって導かれる副文が続いていく。

故郷の娘たちよ。きみたちのなかで一番美しい娘が、夏の午後の薄暗い図書館で、ジャン・ド・トゥルネで1556年に印刷されたという、小さな本を見つけたとしよう。〔……〕

親しくなってくると、きみたちはひそかに、ディカ、アナクトリア、ギュリノ、アティスなどと呼びあうようになるだろう。その名はおそらく、若いときに旅をして長いあいだ変わりものとみられていた、近くに住む中年の男が、きみたちに教えてくれたものだろう。〔……〕

その中年の男は、きみたちのために話をしてくれるかもしれない。古い旅日記を取りだしてくれるかもしれない。だが、どうだろうか。〔……〕きっとかれは、サフォールの詩を翻訳するなど、そんな仕事はもうずいぶんまえに忘れてしまったと、正直に告げるだろう。それに、そんなことはひとに話すほどのことではない、とかたくなに言い張るだろう。(Rilke: *Werke*, Bd. 3, S. 620f.)

第一段落と第二段落では、動詞は非現実を表す接続法が使われており、語り手の願望を含んだ推測が盛り込まれている。第三段落では、副詞を使って「〔……〕かもしれない」という語り手の推測を表す文、「〔……〕にちがいない」という語り手の憶測を表す文が続いていく。中年男が主語となって、しだいにものごとをありのままに述べる文になっていく。時制は一貫して現在形のままである。

『マルテの手記』というテキストは、そのほとんどがマルテによる一人称の語りであるが、この箇所だけはマルテが登場しない。しかし逆に、独立した副文や

副詞や助動詞を用いることによって、語り手としてのマルテが際だってくる。

語り手による推測であれば、それは架空の話であって、あくまでもマルテによる空想の物語だといえるだろう。しかし語り手の推測も、マルテが語っている場面ではなるほど現実離れした話かもしれないが、未来への可能性を考慮に入れるならば、マルテの未来の姿が先んじて語られているのだとも考えられないだろうか。

マルテの語りは、パリの姿から出発していた。現実に見たものを語り出すところから、子どものころのできごとを思い出しては物語り、母とアベローネから聞いた話を再現していく。さらに、第三者から聞いた話を語り直したり、歴史的人物について話すこともあった。話のなかで時代と場所が異なっても、話の内容は、マルテ自身かマルテの肉親が、あるいは歴史上の人物が経験したことであった。

ところが断片68では、誰が主人公となるのであろうか。この点ははっきりとはしない。話の中心人物は「中年の男」なのであるが、それが誰なのかは明らかにされていない。では、断片68のなかに登場する中年男とは、いったい誰なのであろうか。

中年男とは、これまで考えられてきたように、ロダン、セザンヌ、クロップシュトック、キルケゴールなど、リルケに影響を与えた芸術家なのだろうか。中年男は、若いころに放浪生活をしたのち、故郷ウルスゴールへ帰ってきた変わりものとされている。また、サフォールの詩を読むのが楽しみであり、詩を翻訳することもあったという。娘たちと出会ってからは、旅日記を取りだしては、しばらく忘れていたサフォールを思い出し、ふたたび翻訳に没頭することになる。

このような生き方は、リルケに影響を与えた芸術家たちというよりも、むしろ、マルテ自身にふさわしい姿ではないだろうか。マルテは故郷を離れて、北はロシアから南はイタリアまでを旅している。また、旅日記を付けていたこと、サフォールの翻訳をしていたことなども、作家であるマルテと結びつくだらう。またサフォールについては、見返りを期待しない愛という点でもマルテと接点をもつ。マルテは、ここで自分自身の未来の姿を描き出そうとしたのではないだろうか。

断片68のなかの孤独な男に未来のマルテの姿を重ね合わせることができるなら

ば、マルテの語りもぐっと広がりをもつことができるだろう。そうであればまた、過去・現在・未来という時間にとらわれることのないブラーエ伯の語り方も、マルテに受け継がれていることになる。振り返って考えれば、未来を語ることは、ブラーエ伯の語り方の特徴であった。ブラーエ伯のようにマルテも、まだ起こってはいない未来のできごとを、すでに知っているかのように話すことができたのではないだろうか。

最後の断片71において、『マルテの手記』の全体を流れる主要テーマがもう一度取り上げられるところで、放蕩息子が放浪のすえに帰郷したということも、マルテ自身の帰郷を暗示しているのではないだろうか。見知らぬ土地で友もなく悲惨な暮らしに耐えているマルテが、故郷を離れてさまざまな土地をさまよい、みじめな姿になりながらも故郷へ戻ってくる、放蕩息子と重ね合わされることになる。放蕩息子の帰郷とともに、マルテの帰郷も可能性としては生まれてくるのである。

『マルテの手記』は、いくつもの断片的な語りから構成されているが、最後の断片では、マルテ自身には触れられていない。マルテがその後どうしたのかは、読者にはわからない。だが、マルテのなかにある未来を語る能力と、マルテが帰郷する可能性とを重ね合わせて読むならば、そこには、いつの日にか故郷に戻ったマルテが、一人で静かな暮らしを送っている姿を見いだすこともできるであろう。

おわりに

『マルテの手記』はさまざまな語りによるエピソードから成り立ち、現在と過去の物語が混在することはこれまでも指摘されてきた。本論文ではさらに、未来について語る可能性を検討して、マルテが未来を物語る場面を探り当てたことにした。

まず、マルテにとって語りの模範である祖父のブラーエ伯を取り上げたが、ブラーエ伯は、まだ知ることのできないこと、つまり未来のことについても予言者のように語ることのできる人物として描かれていた。生まれるまえのできごと、過去のできごとはもちろんのこと、未来に起こるであろうことをも、現在のでき

ごとであるかのように語る能力が、ブラーエ伯を真の語り手にしていた。祖父のもつ未来を語る能力が、マルテ自身にも受け継がれているのである。

マルテは、不安と孤独という現実を書きとめることから始めていくが、病気と死について語る場所では、あたかも絶望の縁にいるかのようなのである。だが、マルテがみずから死を選ぶようなことはありえない。現実のできごとに絶望しているように見えても、マルテは未来への可能性を捨ててしまったりはしない。未来への可能性をあきらめないでいるからこそ、マルテは書きつづけることができるのである。断片14で明示されているように、可能性に気づいたものは、それを書きとどめなければならない。書くとは、ヘルダーリンが述べているように、可能的なものを実現するための最初の一步だからである。

『マルテの手記』という作品から、絶望だけを読み取らないでほしい。リルケ自身が読者への手紙にそう書いていた。不安と絶望に満ちた『マルテの手記』を読むことによって、同じように絶望に陥るのではなく、そこから逆に、希望を見つけだしてほしい。リルケはそう望んでいたのであろう。

読者は、『マルテの手記』というこの開かれた物語を読むことによって、マルテの未来を思い描くこともできる。マルテの語りは予言的にも聞こえてくるが、予言的な語りとは、絶望の淵にいるときに可能的なものを生みだそうとする、ことばの力なのである。作者のリルケは、『マルテの手記』を完成したときに気力を失い虚脱状態に陥ってしまったが、しかしこの作品が読者を絶望の淵へと誘うことはない。なぜなら主人公のマルテは、祖父ブラーエ伯のように実際に経験していないことを語るだけでなく、未来を語る可能性を読者に呈示することもできるからである。

注

『マルテの手記』のテキストはつぎの『リルケ全集』を用い、本文中に引用箇所を示した。

Rainer Maria Rilke: *Werke. Kommentierte Ausgabe in vier Bänden*, hrsg. von Manfred Engel, Ulrich Fülleborn, Horst Nalewski, August Stahl, Frankfurt a. M. 1996.

- (1) Vgl. Ulrich Fülleborn: Form und Sinn der *Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*. Rilkes Prosabuch und der moderne Roman, in: *Unterscheidung und Bewahrung*, hrsg. von Klaus Lazarowicz und Wolfgang Kron, Berlin 1961, S. 148.
- (2) Vgl. Jürgen H. Petersen: *Der deutsche Roman der Moderne. Grundlegung - Typologie - Entwicklung*, Stuttgart 1991, S. 69.
- (3) Vgl. Fülleborn: Form und Sinn der *Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*, S. 163.
- (4) Vgl. Ernst Fedor Hoffmann: Zum dichterischen Verfahren in Rilkes *Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*, in: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, Bd. 42 (1968), S. 213.
- (5) Vgl. Judith Ryan: Hypothetisches Erzählen. Zur Funktion von Phantasie und Einbildung in Rilkes *Malte Laurids Brigge* (1971), in: *Rainer Maria Rilke*, hrsg. von Rüdiger Görner, Darmstadt 1987, S. 251.
- (6) Vgl. Harro Müller-Michaels: Daß man erzählte, das muß nach meiner Zeit gewesen sein. Zu Funktionen des Erzählens in Rilkes *Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*, in: *Literatur für Leser* 1985, Heft 1, S. 16.
- (7) Vgl. Petersen: *Der deutsche Roman der Moderne*, S. 82.
- (8) Vgl. Hans Egon Holthusen: *Rainer Maria Rilke*, Hamburg 1958, S. 112.
- (9) Vgl. Petersen: *Der deutsche Roman der Moderne*, S. 98.

(よりかわ まゆみ ドイツ文学)